



雨夜物語  
大之巻  
上





物さうり石を丹世に於て愛を以てて光源氏此の結  
 ららちあやふたりけりけりけり。中よりあやふの  
 志れさうらむ心ごとくあやふの志れけり今をいし  
 けりし人衆あやふにわけてあやふをいしけり  
 けりけりけりけり。あやふのけりけりけり  
 けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
 あやふ言ふことのさうらあやふのけりけりけり  
 けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

雨

草子

昔はよのちかちかあつておもしろいほどに  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを

うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを  
うたふたふたのうたをうたふたふたのうたを

源氏物語を、いへるまはあはれ人あり。藤原は  
為事なり。それいづくのふれかゝん  
よれ、いへるまはあはれ人あり。藤原は  
いへるまはあはれ人あり。藤原は  
いへるまはあはれ人あり。藤原は  
いへるまはあはれ人あり。藤原は  
いへるまはあはれ人あり。藤原は  
いへるまはあはれ人あり。藤原は

一、其書之體裁，蓋仿漢書之體裁，而略去其繁複，取其簡明。  
 二、其書之內容，則仿漢書之內容，而略去其虛浮，取其實錄。  
 三、其書之筆法，則仿漢書之筆法，而略去其雕琢，取其樸實。  
 四、其書之結構，則仿漢書之結構，而略去其冗雜，取其清晰。  
 五、其書之語言，則仿漢書之語言，而略去其生僻，取其通俗。  
 六、其書之敘述，則仿漢書之敘述，而略去其繁瑣，取其簡潔。  
 七、其書之論說，則仿漢書之論說，而略去其空泛，取其切實。  
 八、其書之紀事，則仿漢書之紀事，而略去其瑣屑，取其重大。  
 九、其書之載文，則仿漢書之載文，而略去其虛偽，取其真實。  
 十、其書之存史，則仿漢書之存史，而略去其偏私，取其公正。

一、其書之體裁，蓋仿漢書之體裁，而略去其繁複，取其簡明。  
 二、其書之內容，則仿漢書之內容，而略去其虛浮，取其實錄。  
 三、其書之筆法，則仿漢書之筆法，而略去其雕琢，取其樸實。  
 四、其書之結構，則仿漢書之結構，而略去其冗雜，取其清晰。  
 五、其書之語言，則仿漢書之語言，而略去其生僻，取其通俗。  
 六、其書之敘述，則仿漢書之敘述，而略去其繁瑣，取其簡潔。  
 七、其書之論說，則仿漢書之論說，而略去其空泛，取其切實。  
 八、其書之紀事，則仿漢書之紀事，而略去其瑣屑，取其重大。  
 九、其書之載文，則仿漢書之載文，而略去其虛偽，取其真實。  
 十、其書之存史，則仿漢書之存史，而略去其偏私，取其公正。

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

Handwritten text, possibly a date or a specific reference, located in the upper right quadrant of the page.

Main body of handwritten text in a cursive script, consisting of approximately 12 lines. The script is dense and characteristic of historical documents.

بسم الله الرحمن الرحيم

الحمد لله رب العالمين  
 الذي هدانا لهذا  
 الذي كنا لنهتدي لولا  
 ان هدانا الله لكوننا  
 من الخاسرين  
 الحمد لله الذي هدانا  
 لهذا الذي كنا لنهتدي  
 لولا ان هدانا الله لكوننا  
 من الخاسرين  
 الحمد لله الذي هدانا  
 لهذا الذي كنا لنهتدي  
 لولا ان هدانا الله لكوننا  
 من الخاسرين

الحمد لله الذي هدانا  
 لهذا الذي كنا لنهتدي  
 لولا ان هدانا الله لكوننا  
 من الخاسرين  
 الحمد لله الذي هدانا  
 لهذا الذي كنا لنهتدي  
 لولا ان هدانا الله لكوننا  
 من الخاسرين  
 الحمد لله الذي هدانا  
 لهذا الذي كنا لنهتدي  
 لولا ان هدانا الله لكوننا  
 من الخاسرين  
 الحمد لله الذي هدانا  
 لهذا الذي كنا لنهتدي  
 لولا ان هدانا الله لكوننا  
 من الخاسرين





のつてた大座敷の所むまを  
れうらうらく双中持の相妻  
の帯乃由ひくうとこのま  
乃由もころれまがし乃中持  
なりまてのまがしこのは  
まがし乃由れかまをま  
てう大座敷の所むまがしこの  
所むまがし乃由を教へて  
いう。双中持乃由氏  
のまて毎うこの従才之  
かづく かづく  
いざはーおまをま  
まがし乃由かづくまがし  
乃由乃由おまをまがし  
まがし乃由おまをまがし  
かづく乃由おまをまがし  
かづく乃由おまをまがし  
まがし乃由おまをまがし

づかへをせよめなまよまをまがし乃中持は

まがし乃中持

まがし乃中持

まがし乃中持

まがし乃中持

まがし乃中持

まがし乃中持

ハロ一乃由万葉  
錦綾乃中丹畏有齋児  
毛云々竹取物行小几帳  
のうらうらくまがし乃由  
つれかづくまがし乃由  
乃由乃由乃由乃由乃由  
まがし乃由乃由乃由乃由  
いう。

らひかり。遊仙窟よ  
料理の字をまがし乃由  
と割ての僧尼令と料

まがし乃中持

まがし乃中持

まがし乃中持

まがし乃中持

まがし乃中持

まがし乃中持

まがし乃中持



志をうりかたよりいで

俗めくもまわりやうな  
るさつす轉一ハハぶつ

ハハぶつ 大殿油

約めくハハ即ハハ

火のゆきさう煙臺

まく辨登の類なる

むまび煙臺ハ儀式の  
とれた庭をどうくと

ハハ 折厨子ハ厨子の  
厨子ハ折厨子の厨子の

折厨子の厨子の厨子の

紙管の料紙ハ柳重

きをうくまちがほわらん夕ぐさたど

の ふ ちをえはハあつらと 怒之極

まじまじ ちをえはハあつらと ちのか大切まじ

せちりからたまふげんがどハかやうよおち

ぞうなるみづーふるちまきちりしたまふ

べくもわらぎふかくとらからたすよへ

かかれはこれハ二のまぢられふやまきこたうべ

源氏の毛むくもをえむさくふかきまとゆり 源氏の毛むくもをえむさくふかきまとゆり

こころづえまふかくまぶぐなるものぞも

こそゆりまれとそふあてふ いふま こそゆりま

まらちと 以中持 とよ中ふいあつるもらう

備 りくちれまてらるるをむたひひよ

せくうがおもをかーと 源氏の毛 おぢせど

らとまじれまてらるる かれまじひ ちれらり

紙管とみえり

のこころを畧せり

よとせり折厨子の

よめうあまあふ

ハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハ

乃多あり。万葉集。各  
寺師人死為良思妹  
不所知。日異。蘇治人丹

お母ごう  
誤るるべし。大空。とり  
志まう。たふふ。いり  
と。加茂縣主。ハハ。ひつ。紫  
式部日記。ふ。う。か。ん  
と。お。ひ。た。う。人。ハ。お。は  
そ。ら。ま。く。ハ。ふ。ふ。ち。ち  
け。ら。ん。ち。う。こ。が。う。う  
め。れ。び。と。あ。る。を。お。い。ん。ば  
い。う。く。大。ま。う。れ。後。ま。や  
あらん。

二の町 一の町ハさうさう  
町。二。ハ。それ。ハ。次の  
ま。と。居。る。町。と。い。ふ。ま  
ま。に。次。る。う。ま。と。い。ふ。俗

そこのそこ  
其處より。其許といふ  
よ。何。一。万。葉。集。よ。そ  
こ。ま。う。と。い。ふ。其。所  
此。所。と。い。ふ。り。  
これハ。あ。り。と。志。ま。い。が  
あ。ら。う。け。い。も。さ。う。さ。う  
の。教。え。も。さ。う。さ。う。い。い  
う。く。何。う。う。な。ん。つ。く。ま  
ま。と。ハ。い。ん。か。い。も。か。あ  
ら。ぬ。報。の。も。た。と。い。ふ。ハ  
ま。ま。に。お。い。と。い。ふ。下。の  
教。條。の。端。ハ。一。村。ハ。む。ち  
く。い。條。く。ハ。決。理。を。定  
せ。り。ま。し。ね。け。い。け。り  
死。を。ま。し。て。ま。さ。く。ハ。お  
の。め。や。ま。あ。つ。り。あ。る  
ん。の。お。い。む。き。あ。ら。ん

つ。これのふみまづういをたまりと。そうから。後。いつ。源氏の

あまよ。そふ。た。い。そ。お。ほ。く。あり。る。ま。ふ。み。ど。い。は。い。く。集。の。こ

た。ま。ふ。ら。あ。す。う。み。を。や。さ。く。な。ん。ま。の。づ。厨

子。い。わ。い。う。ひ。ら。べ。い。と。の。こ。ま。い。わ。が。か。ま

ね。ら。ん。い。は。あ。ら。ん。と。さ。か。こ。く。ゆ。ら。め。あ。ぞ

以中。ま。こ。こ。後。よ。つ。ひ。ぐ。よ。き。う。正。定。の。女。の。こ。れ。ハ。志

種。つ。く。り。ま。い。き。い。も。と。お。ん。つ。く。り。ま。い。き。い。が。さ。も。あ。る。り。あ。ぞ

は。り。を。ま。う。く。又。お。う。さ。い。さ。り。く。な。ん。み。た。ま。い。あ。ら。ん。あ。ら。ぬ。た。だ

い。ま。ば。う。れ。あ。さ。け。の。ま。く。あ。み。ま。と。ち。う。ま

清。文。の。ま。い。れ。あ。ま。と。い。み。う。み。い。く。い。ん。え

ほ。こ。ら。ま。さ。い。ま。い。く。く。ち。ら。い。な。ご。ま。か。り。ハ。ま。い。ぶ。ん。よ。よ

漢。文。の。可。ト。イ。フ。意。ハ。い。ろ。い。ま。も。お。お。か。う。と。み。た。り。あ。ま。さ。と。

ま。い。も。そ。も。ま。さ。い。に。その。あ。ら。み。ま。い。か。い。い。か。か。こ。た。い

そう。お。ん。ま。い。び。よ。う。お。う。び。の。ま。い。い



そのあきさしをみ

「あきさし」たるは  
るよふわらひのよきま  
のやうなるをいふま  
さみ進むるをいふま  
まらみたるをいふま  
さみのめは歌よみかひ  
くまざらむらうりや  
ゆきづらむ けふのゆき  
よありてももよひの  
りてあるもよひの故  
事出来あるをいふま  
もみづらむのよきま  
かぞくをいふま  
しつろいふまのよ  
につきまといふま  
まきよおれむなる  
るや雅うしむる  
いふまのよきま

て歌よまらむといふ

万葉の故縁とかかり  
あきさし 含笑の万葉  
よ梅の花いづれや  
といふ花のまよひけ  
ま食くあるをいふま  
ふとわいと音通へ  
人形をいふま  
ふむおれむらうり  
ふむおれむらうり  
ふむおれむらうり  
ふむおれむらうり  
ふむおれむらうり

びおれよ人つゝもさる

これまうの小まをさるうひて能はわら  
それ志うあらしと  
と押さうにハあはれ人のうらうらにわかんとあや  
さう小いぐいおしをかりおれひらさ  
を我しむるにさるる人  
よまかひのみさる

にみおらうせわさうにさくれんあまさ

改中持のそのまのつら  
うめたつるけり  
たのむるまのつら

色 我まのつら  
まかげなれむ 保氏のまのつら

とまのつら  
とまのつら  
とまのつら  
とまのつら

あはさるこもやうらん 保氏のまのつら  
うちほく魚

みくさの 一巻一巻の  
かさうまなまきこ人あ

んやこのいさる 改中持のつら  
らとまのつら

ならんあまうまのつら  
はとまのつら

ようたらん 保氏のつら  
まかひのみさる

まじらむ 極  
いなるとまのつら  
保氏 湖木名を詞

むらむらむらむら 女  
とまのつら  
とまのつら

あつた ところかといふ  
後の細之古語より  
さうするべし。古(一)は  
へ中務集よりみゆを  
おふよみしるるべし  
るべし。

さうするべし  
かたはさうするべし  
たるべし

ちやひと ちやひと  
人とのちやひと 直人  
といふおるべし。  
おらちめ 上等部  
公卿といふべし。おらちめ  
約むれば群集のことよ  
て部類あつたものとす。

よまれ こそはあ人のきれたうらむ

ねれづ人よりのかづらき あき かく

ふけもおぬく。きれんよそのけしひと あき

よありまべー。中の志ねなん人のかづ あき

あき あき あき

もろき あき あき

孟 是より上中下三品に分テマワレル中ニツ種性々  
年十品位イラシ

湖 中務集よりみゆを  
おふよみしるるべし

位

下の

あき

あき あき あき

みだまか あき あき

てそのきれぐ あき あき

乃志ね あき あき

くく あき あき

く あき あき

ち あき あき

あき あき あき

湖 中務集よりみゆを  
おふよみしるるべし

上中下の

あき

あき

あき

あき

あき

あき あき あき

けぢめ  
まじりあふ  
まじりあふ  
湖物、今カラ云、結目、掲目

そふれ肉をかざう。人よおとらうと

お入る。そのまぢめをばいぐわぶと

世のほろふほどふたのる乃かみ着

本物のせう。成りのみうちをんとてま

かたり。世のほろふほどふたのる乃かみ着

いしとほれる中將やちとらうてあの志れ

ぐと死あさだめあらしきふいとまきと

きんぎょのしんじゆ  
やんごんごん  
るれえ。貴人高位はうら  
ののののひぶのめた  
ららわのりさよめめ  
ののののよやうれう  
るれえ。貴人高位貴人  
まやんごんごんとい  
る。手着す。とを  
ととと。ととと。ととと。  
大海のいんまもまも

あつとらうと記すもまうと記者の詞也  
記ことおわう。馬のいんごん  
まよよりさるべきまぢめなうねむせの  
人乃お入ることも  
いどがうほ  
まよよりさるべきまぢめなうねむせの  
世ふれ肉をかざう。人よおとらうと  
お入る。そのまぢめをばいぐわぶと  
世のほろふほどふたのる乃かみ着  
本物のせう。成りのみうちをんとてま  
かたり。世のほろふほどふたのる乃かみ着  
いしとほれる中將やちとらうてあの志れ  
ぐと死あさだめあらしきふいとまきと



ふらふらと

いせ物作はまらうして

もあわむりうらうし

と蛇の心あつとと

をめてまうとと

まて

守をうらうら

よりふとや

さうさうの左あ乃

内うのひとよんき

ことま

かづくひ

職負令を

授く受領の職事多

き官あればかれこれ

のさうさうのひとよんき

つちま

きざみ

受領より宰相までの

あつて惟光のひとよ

公はとふ中  
みて世のあな  
もはらむ公は  
やうまぬぬ  
とふ  
タミ河にカ  
カ

大臣の後より受領よ

りり明石入道乃むせ

めの新中品のうちあ

きざみ

きざみ

に殊異のひとよ

てあやうことなる

さうのや

人のさあふれ

はみ

あやの

やうの

きざみ

きざみ

あま

秋春儀乃四位

あま

なう

から

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと



Yamanote Line

うらひくもぐさし

んもこまきり。これおそい 老人のむしとあるが

べたこおちえくめつらむなることか

人ふもおどろく そのけいり

よが おどろく 湖夕顔ニヤ

かみうちおとせりぬ 雅アレタラシ せよと

人よ おどろく おどろく おどろく

おどろくたがることま

おどろくたがることま

とろたろたろ

らばらまひま

と伊勢物語よ

書のい

ちの

けよとい

げある

つう

の おどろく おどろく おどろく

せう おどろく おどろく おどろく

か おどろく おどろく おどろく

ハ何れもそゝるもく  
たるのこゝろ。若或神  
が婦は高きものいふを  
つら下よみぬ。又田舎よ  
おひゆく。父のやうか  
し。蛇の石の上のよ  
若葉のまよひ。ひ  
ハ伊との介乃妻の  
ことも遠くはぬよ  
る。

ハハハヤとほつとほつと  
冬河にまよひてはなせ  
くしんかひはよあは

いながのあし

葵の上のあまうら  
んまつたぐも春ふ  
ゆから人もまと思  
せぬ。いさこみあ  
ぬ。ぬをさみわつて  
者のはね。

一具乃は装束はま  
す。あゝのこよ  
うちまもく。ひか  
ひもまもく。ひか

ももきん  
こもね。こもるき。福やれらよ。  
[その女]

といふおひあがり。まをくしん  
[その女]

たかこも。まね。ゆきさう。びみえ  
[その女]

くしん  
かいうも。くしん。いかにおひ  
[その女]

の介。まを。かきん  
[その女]

くしん  
くしん。まね。かきん。いかにおひ  
[その女]

おひ。こも。いかにおひ  
[その女]

が。いかにおひ  
[その女]

みかれ。バ。我いかにおひ  
[その女]

こも。あま。おひ  
[その女]

いかにおひ  
[その女]

おひ。まね。かきん。いかにおひ  
[その女]

まね。いかにおひ  
[その女]

おひ。まね。かきん。いかにおひ  
[その女]

女 すてゝ

ひやくこの世まつて...  
或は見えは海氏ちが  
のたつたよふかき上  
あつたあつて...  
とつたあつて...  
とつたあつて...  
とつたあつて...  
とつたあつて...  
とつたあつて...  
とつたあつて...

わひくびをなごきちちまき あふ そ

ひふのき あふ ぬほりけい あふ とめく あふ 女

あつみまら あふ まり あふ 乃 あふ 女 あふ は あふ か

とつたあつて あふ ぬほりけい あふ とめく あふ 女

え あふ ま あふ 乃 あふ の あふ ん あふ ぢ あふ 女 あふ か あふ

り あふ あ あふ せ あふ つ あふ お あふ ち あふ の あふ 世 あふ 一 あふ つ

とつたあつて あふ ぬほりけい あふ とめく あふ 女

とつたあつて あふ ぬほりけい あふ とめく あふ 女

但中納乃いひえ あふ

も我相となひ あふ

は堪忍して あふ

あつたあつて あふ

とつたあつて あふ

史記又上合淳徳以遇 あふ

其下下懐忠信以事 あふ

たのいづ あふ をえら あふ づ あふ ん あふ 乃 あふ お あふ ち あふ り あふ の あふ

にもえ あふ ち あふ の あふ ひ あふ き あふ の あふ ぢ あふ の あふ 女 あふ の

を あふ の あふ こ あふ の あふ お あふ ち あふ や あふ け あふ よ あふ つ あふ 乃 あふ ま あふ つ あふ 乃 あふ

く あふ 世 あふ の あふ か あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ

そのや あふ の あふ ぢ あふ の あふ ま あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ

べ あふ の あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ

と あふ の あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ の あふ ま あふ ち あふ

其上らるる君臣をいふ

今ハ三公諸司百官乃  
之をたるとは擧るを

奉ハひやしとつゝは人かを  
合せてももれれはあや  
しとせんと

とられハかり

古今集よまゝとてと  
まればかりかくまれば  
あれいひあはれあや  
きあやといへるはま  
まそしたまればあへ  
よりまゝとまればあ  
まひて遊ふいづれ  
あはれあはれあは  
振よるゝねるをよめ  
そのあはれゆり

女のうへはあはれを  
ひくふあはれあは  
うしき人のあはれ  
あはれ

えうとめつらん乃

是ホハ即末よみゆ  
源氏の心○我れあは  
るあはれとみそめつら  
きりむらうをよめか  
とくハ幸まハ茶  
の上花散里末摘花を  
とく

三公ハ諸司ハたすけられ  
諸司百官

まよとてあはれあはれ  
かよなびあはれこま  
びりまよゆづらう

らん。妻と定ん女乃  
天下の度とてあはれ  
あはれあはれあはれと

まよまひとひよりを思ひあはれ  
その女乃

心のあはれも天トのあはれとて其の本書れんた  
たらるあはれあはれ  
大事とてあはれ

あはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ

下此回ハあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれ

雨

上之巻

つひにふくやまのついで

さだまうがさねるうべうあ

はーも

男のこぶおのよなるらねどみそあ

つるまきうさううとまきんかて

りひとちう人ハ抱あめやううとみえぞて

持 ころう女のももふもくお

なり。されどなるより世の中女の乃あうさあ

みゆあらむらうくよ

されどなるより  
上の心もくおーもろ  
こつとくもろもろく  
まはらうらふくおとハ  
ろく女もあれどまもわ  
ろく世の中をみまろ  
時ハまろもろふく  
ゆーまろのなう  
まろれまろのまろ  
まろれまろのまろ

及 Onomasticon

とゆーま とゆまの まもなりやまをこれか

みるまねえびよハまていさうの

人うハたぐひまうん まゆら とさうせくおり

たまへぬ まゆら まゆら

かちまきこむげなぐらわらる程

れ おの おのうまぐハちとせつかと身をのん

形 かみ かみをかけと杉がさかまらる

夫人ハ何れもわつし  
くちやうらぬ  
トさうのハまらうま  
ハあまらうとれれ

おちとら  
大人めれん  
まろ  
まろ  
まろ

を、ふみつかの、かぶらる、りき、たうく

**男小** おひりちりせきん おひりせつ、まじ **い** あつうとせきん さやうのみみて

ーがねと **本** おひせきん ねがくまさせ **あ** おひりて

あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま

かり **と** あはれま いれよれど **その女** あはれま いれよれよひき

**いれ** あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま

あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま あはれま

又のり、ふれ、又、ふり、ふり、ふり、  
こころ、や、と、つ、つ、  
夕、夕、夕、夕、夕、夕、夕、夕

さう、ひ、り、よ、せ、と  
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま  
と、と、と、と、と、と、と、と  
日、日、日、日、日、日、日、日  
情、情、情、情、情、情、情、情  
り、り、り、り、り、り、り、り  
よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ  
よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

う、う、う、う、う、う、う、う、  
よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、  
**い** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま

よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、  
**い** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま

い、い、い、い、い、い、い、い、  
**い** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま

**い** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま

乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、  
**い** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま

**い** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま

**い** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま

**い** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま **あ** あはれま





あつらふ 際くしね  
 りんごのまへ  
 うーあつね おろしちり  
 人柄なるくさをえり  
 る辨之俗よき〜と  
 つくはれり  
 こりま〜 世日記に小  
 せぬ乃ををり〜と  
 なるも我らとハレ  
 りしころかもあるまう

ごうごう  
 りあひてせんまはれん  
 あかすせんよおまむらむか  
 うま  
 人志ねおひ出 あまの  
 せひもくためつきつきてひとうごりてま  
 けあをれもうちひまりたさ  
あまの  
 けいぞなごあまつらま あつね  
 うま あまの  
 うま あまの  
 ひと あまの

みおつみき〜いとを  
 くらひぬうとぞ  
 死すぞといふ

みおつて  
 なくやうらるる人をとかく あまの  
 ひい〜ひい〜ひい〜ひい〜ひい〜  
 かあ〜ひい〜ひい〜ひい〜ひい〜  
 りり〜ひい〜ひい〜ひい〜ひい〜  
 め あまの  
 かひ〜みんか〜ひい〜ひい〜ひい〜  
 い〜ひい〜ひい〜ひい〜ひい〜  
 ち〜ひい〜ひい〜ひい〜ひい〜  
 ち〜ひい〜ひい〜ひい〜ひい〜  
 ち〜ひい〜ひい〜ひい〜ひい〜

いりやうなましりいりやうなましのかびらしかびらしの乃

いりやうなましの

かびらしの

あしあしししももわわららししももわわららししもも乃 その女乃 いりやう

ととああひひししるるここももああららししるるここもも乃 俗言一切者のかさしる

んんははいいししちちららししちちららししちちららしし乃

とと名名ななほほくくーーかかんん乃 又つつぬぬははしし乃

そそづづくくーーくくししももああららしし乃 女の乃 何ぞの時

よよしし乃 其業を いりやうの いりやうの上 いりやうの上 いりやうの上 いりやうの上

いりやうの上

いりやう

あのかどけりゆめをいりやう  
ばいし和名抄 樗木 和  
曾波乃木とありも今り  
うきうきうきうきうき  
れいれいれいれいれいれ  
よりうてよりうてよりうて  
ゆえ備意あるをいりやう  
いりやう

世の本にかのさめいりやう  
あしあしあしあしあし  
馬いりやう

いりやう  
万葉よりいりやう人をいり  
人といりやういりやういり  
きりやういりやういりやう  
くはとゆりやういりやう  
いりやういりやういりやう

あありりかか乃 官位筋目をいりやう いりやう いりやう いりやう

いいしし乃 定めりぬいりやう

ななががいい乃 いりやう

ををいい乃 いりやう

ちちきき乃 いりやう

とといい乃 いりやう

いい乃 いりやう

ゆきりー 万葉に  
故縁聞而ともい由末の  
義之とい何るもとあり  
とりかごごごーたごゆ  
五とをうりこようど  
むがりもいづ。

うーろやま〜 背目痛  
上のうーろやま〜  
かろ〜ろやま〜  
きし。

うーろやま〜  
古書よみみえぬことば  
後拾遺集よ匡衡は乃  
おも衣をうら半よ  
せうによんば女のんご  
ー半のこご〜かろく  
してたご〜たごよ  
るら又志乃うらぬをど  
きはの色のま青よて  
つたれ。

あまのいひおくべりける。 あまのいひおくべりける。

その あまのいひおくべりける。

らんをばよらびよおのひま〜 あまのいひおくべりける。

らるかこあらんをもあまがらよりめく あまのいひおくべりける。

えん〜 あまのいひおくべりける。

よらび〜 あまのいひおくべりける。

えん〜 あまのいひおくべりける。

用言ニヨム

ぢ〜 あまのいひおくべりける。

あまのいひおくべりける。 あまのいひおくべりける。

を〜 あまのいひおくべりける。

あまのいひおくべりける。 あまのいひおくべりける。

あまのいひおくべりける。 あまのいひおくべりける。

あまのいひおくべりける。 あまのいひおくべりける。

あまのいひおくべりける。 あまのいひおくべりける。

あまのいひおくべりける。

抱きつゝよみ  
 伊勢物語は、或女のい  
 ていゝまはらうとい  
 ひやせんとよみたるを  
 有常の妻乃、あまた  
 ありしうなむを兼て  
 狩りてそとへりたり。

海きと  
 さらうづらむとよみしうれぬう。 うみ

つらな侍りし女房ちまの ちま

事ども 抱きよみしをまきこいとお

それよかるしうちまことうねる。

みこをまきなんおしはらうし。 みこ

よいよからうしうちまこいひたる事 事

ありんごうしうちまをまきこいみ

あり乃まようしうちまこいひたる事 事

ハハ 人の心をみちねやうまおびか ハハ

こいひをまきこい その男の 心をみんと 引よ

まらね か ながき世のいの か

よあるいとあらたなき か

か あり 人 あり 人

ありれまきみぬれば あり

人の心をみちねやう

伊勢物語は、かゝるうか  
 りひかりてままと  
 るごとく、夫の心を、既  
 に知りたるを、臨時に  
 つらねやう、乃ち、つら  
 ね、あつて、あせむる、男  
 想、く、大、本、を、ま、き、こ、い、事  
 につけ、く、神、を、む、ハ、の  
 事、

古御等之なるハ老と云  
 びと云ふは本朝文粹  
 に女をいふありて御と  
 謂貴女為御蓋取貴

即ち 心かき女おむるふのたて居りしるん  
 やがてあぢななるぬか  
 おひし

福はいとらるまあやうしく  
 世

かへみまなくもかりらぬ  
 いくあ

船がかくるるおぼるうにまはよな

どやういあひまゆる人きさあひ

一向い 憂  
 ひまらうようとも  
 おひまられぬ男

女のおまらうりるを  
 きつけくならみごとせ

あまの俗云  
 こころあひ  
 うかたはる  
 うらみふ

人御之義也とあり  
 こころあひと下る  
 りあるれば後ハ女の通  
 稱とあふそ人あふぬ  
 女と云ふ御等と云  
 づありこハ侍る女房  
 の中ハ侍る一と云  
 ておとらと云ふ  
 あつち内身 大和物語  
 平仲が毛好たる御  
 といふより男が世とい  
 みまきさすうらと  
 ままの夜はよゆ  
 ひまみぬ

そのよりを女の  
 つふ人あぢとちあぢ  
 君の内ハ  
 ありれありらるもの証  
 あつち内身をなぢつあよ  
 後悔の  
 思  
 志のやれあふらぬれそのめあひたさう  
 くごまにえ祢ん一えぢ

堪忍一ぢ

年徒者不厭 恋者益  
 友この友を二六飯は老  
 口ひきみきりぬともと  
 よみてのせみん万葉  
 きてハ、あれ古出くよ、  
 むともとよむべきなら、  
 さしどもちく、おひそち  
 ひそくとよめる養、よ  
 叶へ、万葉のハ、老人の  
 口つきをひひくハ若  
 々れ、たなく、時の口つ死  
 をいさ。

ともおほうめるよ  
一ひひ屋まうらうるをそれをもむ  
 とけもならく  
ちまうふこ  
 へききたるーとみゆひつべー  
俗して濁世よあつをいさ  
通るるねんこ  
 まごうに志め依ほごうりもあまうかびよ  
 てハ、ううてあきなるそたぶよひねべ  
うやまのそと  
 くぞ覚ゆる。くえねもくせあ  
男のうら  
 さかぞ、あまにもあまぞ、たづ祢と  
男の方  
 りくらんも。  
一ひひ男をまそく、あませーあられ  
即そのま  
イあひのそ

ほど、後よこがせくとこ  
 うれをそくも、このたぐ  
 ひまう。

老せおひせ  
男のうら  
 その思ひ出、うらーきやーあうざう  
あま  
 んや、あーくもよくもあひそひく、とらん  
時  
 をうも、がらんき、あみをもまじぐーだん  
とがめがとゆるま  
 なるこそ、ちざうふかく、あられるうめ。  
ひとくひあ  
 我も人をー  
あま  
 乃めくふたれ、わハ、  
たづひよあま  
あま  
そのま  
 なるめよ、  
たづひよあま  
 うつろふるあらん

ふのまのわ  
 うろろふあ  
 うろろふあ









はるばる〜うらやま  
さんそちうらぬうれ  
いとらり。

そいづきされぢみ

そいづきいぞとんちん  
万葉集巻第十橋の  
つとよりらひきうけ  
己が母とさうくをさ  
すごが父とさうくを  
ま〜伊蘇婆比座興  
いづか〜とととと  
をささる〜とととと  
語之まは法例もまた  
むれりのゆゆと  
〇ごれハ洒麗の音と見  
え〜とととととと  
といハ実様ととと  
〜面白く様あると  
いふ〜みハ〜ととと

あづの〜とととととと  
上野の〜とととと

格の〜とととととと  
さあ〜とととととと

おち〜とととととと  
墨伶し

け〜とととととと  
上野

日〜とととととと  
か〜とととととと

の山〜とととととと  
魚

ち〜とととととと  
鬼

う〜とととととと  
驚

ら〜とととととと  
絵か〜人  
お〜とととととと

り〜とととととと  
突  
人

さ〜とととととと  
た  
よ〜とととととと

のた〜とととととと  
自然の〜とととととと

ろ〜とととととと  
ま〜とととととと

か〜とととととと  
図  
険〜とととととと

大幸と〜と

これハ〜とととととと  
道具ハ〜とととととと  
定〜とととととと  
て〜とととととと  
〜とととととと

の上よりしたるは格別  
 二のりといひしては  
 人の本まゝあつては  
 そとをたれて今めき  
 るそいあらうはほ  
 の備ふ故実をとり  
 なる上ものつくり  
 かくあるはほま  
 りもあらうくは  
 なるやうあるべし  
 ありは格別のこと  
 かく半のこゝと  
 ぼふえちて本ま  
 右より左のまぢ  
 してまづりある  
 りひきよ又おの  
 り人のおのつり  
 るまはまよりそ  
 たとをいせらる

一は格別とす  
 二は格別とす  
 三は格別とす  
 四は格別とす  
 五は格別とす  
 六は格別とす  
 七は格別とす  
 八は格別とす  
 九は格別とす  
 十は格別とす  
 十一は格別とす  
 十二は格別とす  
 十三は格別とす  
 十四は格別とす  
 十五は格別とす  
 十六は格別とす  
 十七は格別とす  
 十八は格別とす  
 十九は格別とす  
 二十は格別とす

繪所

拾芥抄云畫所  
 在建春門内東脇御書  
 所北有別當五位藏  
 人預墨畫等  
 鬼のりは 韓子曰客有  
 為齊王画者齊王問  
 曰画孰最難者曰犬馬  
 雞孰易者曰鬼魅最  
 易夫犬馬人所知也且  
 暮罄於前不可類之故  
 難鬼魅無形者不罄於  
 前故易之也  
 まくらぬ すんぬは  
 あぬすすけのまを  
 云く末橋の巻よ  
 うれすうらうの  
 まえのまをそと  
 市橋のすけま

一は格別とす  
 二は格別とす  
 三は格別とす  
 四は格別とす  
 五は格別とす  
 六は格別とす  
 七は格別とす  
 八は格別とす  
 九は格別とす  
 十は格別とす  
 十一は格別とす  
 十二は格別とす  
 十三は格別とす  
 十四は格別とす  
 十五は格別とす  
 十六は格別とす  
 十七は格別とす  
 十八は格別とす  
 十九は格別とす  
 二十は格別とす

あみり 花鳥云

雅無御記云金岡

墨墨山十五重廣

高五重七

うらまひおきく そのか

もむきのあさやまを

用おきて天衣紀よ

ろあひおきくとま

有意とまを

つらげ

あま集よとてげ

んうさく抱ひ乃

花の枝をばつば

又はく

白氏文集云吟苦支

頤曉燭前

ちどめれとらむはさきりーくとも中侍ん

好色御記

そちかかぬれば

海氏の

あま海氏のあまらあやこと

中将いふくきん

信

類

杖

むらぬゆへ

海氏の

法

とらうとまつかせんあのみちよらもがつかを

かろれどがる流りぞおのくむ

雅無御記の中のみよめ

えーのびとめさるんありは家

からまきつらぬむとそりぬ

